

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 21 日現在

機関番号：13901
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2012～2014
 課題番号：24520152
 研究課題名(和文)「観客」の創造 映画受容と社会主体の史的関係

 研究課題名(英文)Creating "the Audience": Historical Relationships between Film Reception and Social Subjects

 研究代表者
 藤木 秀朗(Fujiki, Hideaki)

 名古屋大学・文学研究科・教授

 研究者番号：90311711

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、映画観客像の変容を歴史的・社会的文脈に照らし合わせながら解明することを目的としてきた。具体的には、「民衆」「大衆」「国民」「皇民」「市民」といった、近代日本の社会主体を指すものとして使用されてきた概念・カテゴリーを切り口にしながら、それらとの関連で映画観客がどのように規定されたり問題にされたりしてきたかを検討した。この成果の一部は、共著書『「戦後」日本映画論』(2012年)、共著書Oxford Handbook of Japanese Cinema (2014年)、学術雑誌『JunCture 超域的日本研究』5号(2014年)などで発表した。

研究成果の概要(英文)：This project has aimed to disclose how the images of film audiences have changed in the social and historical contexts. More specifically, it pays attention to the concepts and categories such as "the people," "the masses," "the national," "the Imperial," and "citizens" that each designate certain social subjects, and in so doing, I have analyzed how film audiences have been defined in these terms.

Parts of this project have been published in the anthologies, A Study of "Postwar" Japanese Cinema: Reading the 1950s (2012) and Oxford Handbook of Japanese Cinema (2014) as well as journals such as Mecedemia (2013) and JunCture (2014).

研究分野：映像学

キーワード：映画 観客 日本近代史 社会史 メディア受容 芸術史 文化政策 思想史

1. 研究開始当初の背景

映画観客像の変容を歴史的・社会的文脈に照らし合わせながら解明することを目的とした背景には、主として二つの問題があった。

第1に、近年少しずつ映画の受容に関する研究は増えつつあったが(例えば、日本映画研究に関して言えば、古川隆久『戦時下の日本映画』(2003年)、加藤幹郎『映画館と観客の文化史』(2005年)、吉見俊哉他編著『日本映画は生きている 第3巻 観る人、作る人、掛ける人』(2010年)、藤木秀朗編著『日本映画叢書 第14巻 観客へのアプローチ』(2011年))が、本研究が目指すような、社会主体の概念との関連で観客を捉えようとする研究はほとんどなかった。むしろ、依然として「大衆」や「民衆」がいつの時代にも映画観客を代表しているかのように素朴に前提にしている場合が多かった。海外では、日本映画の研究と(日本映画以外の)映画受容研究は非常に発達しており、その文献は枚挙に暇がないが、日本での映画受容の研究となると皆無に等しいという状況であった。

第2に、民衆論、大衆論、市民論、国民論に関しては、確かに歴史学や社会学に膨大な蓄積があり、それらの研究には2つの傾向が認められた。1つは、民衆、大衆、市民、国民といった社会主体の歴史的・社会的な意味や性格を突き止めようとするもの。もう1つは、そうした社会主体そのものを探究するというよりは、言説上で意味付けられたそれらの概念を分析しようとするものである。しかし、後者について言えば、先行研究はそれほど多くはない。とはいえ、近年、1960年代・70年代に歴史学でブームとなった民衆論を再検討する動きがあり(例えば、キャロル・グラック『歴史で考える』(2007年)、ひろたまさき「パンドラの箱——民衆思想史研究の課題」(2006年))、また思想史的に社会主体の概念をとらえ直そうという試みが出てきており(例えば、Simon Andrew Avenell, *Making Japanese Citizens: Civil Society and the Mythology of the Shimin in Postwar Japan*, 2010)、本研究では、これらの先行研究の成果を参考にした。

本研究は、こうした問題を背景に着想を得て取り組もうとするものであった。

また、2007~2008年度の科学研究費補助金研究「映画を媒介とした消費と教育の史的関係——戦前期日本」および2009~2011年度「映画を媒介にした消費と教育の史的関係——戦前期から占領期へ」を継承・発展させたプロジェクトであったことも付け加えておきたい。

2. 研究の目的

こうした問題意識を背景として、本研究は、「民衆」や「大衆」といった概念が特定の

時代に流行語となったことに注目し、それぞれの概念がその時代にどのような言説を通して流通し、どのような意味が付与されたのか。そして、その時代に映画観客がそうした概念と同一視されていたことにはどのような歴史的・社会的な意味合いがあるのかを分析することを一つの目的とした。また、先行研究で見過ごされてきた映像メディアの受容者、とくに映画の受容者と社会主体との関係に焦点を当て、映画観客との関係から社会主体の創造・想像の問題を捉え直すことをもう1つの大きな狙いと見た。

より具体的には、(1)それぞれの時代の多様な言説においてどのような映画観客像が想像されてきたのかを分析すること、そして(2)その分析を通して、社会主体というものがどのように考えられてきたのかを考察することを目指した。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、「民衆」「大衆」「国民」「皇民」「市民」といった、近代日本の社会主体を指すものとして使用されてきた概念・カテゴリーを切り口にしながら、それらとの関連で映画観客がどのように規定されたり問題にされたりしてきたかを検討した。

さらに具体的に言えば、主として4つの方法を採用した。

第1に、政府関係者による言説を調査・収集し、分析を進めた。例えば、戦前については文部省関係者をはじめとする教育関係者の調査報告や言説を調査・分析した。政府機関は、何を目的に、映画観客や民衆娯楽の受容者を調査しようとしたのか。彼らは、消費、教育、娯楽の三者関係をどのようにとらえ、民主という考え方と社会統制のバランスをとろうとしていたのか。こうした観点から分析を行った。戦後については、政府関係者の関わりが比較的少なくなるが、戦後の文化政策に関わる言説を収集し考察を行った。

第2に、知識人による見解・指導を検証した。映画観客、「民衆」、「大衆」、「国民」、「皇民」については、政府関係者以外に、教育関係者、社会学や美学の研究者、そして映画批評家・文化批評家などさまざまな立場の知識人たちが発言をしてきた。そうした発言は、映画をめぐる社会のあり方について一定の認識をもたらすとともに、その見解の相違は社会的な軋轢をも示していた。知識人の社会的役割や立場の違いを考慮しながら、その数々の言説を分析した。

第3に、1930年代後半から1940年代にかけては、「国民」「皇民」「大衆」と映画観客の関係づけのされ方について考察するために、狭い意味での日本国内(当時の言葉で言う「内地」)流通した書籍・雑誌・新聞だけでなく、帝国日本で流通したとされる刊行物も調査し、関連する言説を収集・分析した。

また、戦前と戦後の関係性を考えるために、両時代における「大衆」「国民」に関する言説の比較分析を行って来た。

第4に、「市民」については、他者から規定されがちな「民衆」や「大衆」と違って、自らを「市民」として規定する場合が多いところから、「市民」概念の歴史的系譜を調査しつつ、「市民」を自ら名乗る人たちの言説と活動を調査し分析を行った。そのため、調査・分析は、書籍や雑誌だけでなく、ミニコミ、ニュースレター、チラシ・ポスター、ウェブサイトなどにも及んだ。また、市民による自主上映会に足を運んでフィールドワークを行ったり、そうした場で上映される映画の監督にインタビューを行ったりした。

4. 研究成果

主たる研究成果は、以下の3つの主題に分けて発表してきた。

第1に、1920年代から1940年代前半にかけての「民衆」と映画観客との結びつきについて検討した成果がある。すなわち、大正デモクラシー期から総動員体制期にかけての文部省関連の機関誌や書籍、および観客を扱った批評家や研究者の記事・書籍を調査・分析し、そこで映画観客が「民衆」と結びつけられながら、民衆観客の主体性が総動員という考え方に包摂されていく過程を明らかにした。映画観客と同一視されて理想化された「民衆」は、決して中立的・客観的な意味として規定されたわけではなく、むしろその時代の風潮との兼ね合いから理想化され、戦時期には「国民」として統合されようとした。しかし、その一方でその概念をめぐって矛盾や葛藤も様々に生じていた。こうした状況を浮かび上がらせたのが「民衆」に関するプロジェクトの成果である。これについては、図書③で発表している。またここでの成果を図書②にも取り入れている。

第2に、1930年代から1950年代に至る「大衆」と映画観客との結びつきについて考察した成果がある。1930年代、それまで主流の呼称だった「民衆」に代わって「大衆」という言葉が広く使われ、映画観客はこの概念と結びつけられて言及されることが多くなった。しかし、この概念は誰もが同一の意味で使用していたわけではなかった。すなわち、戦前は「大衆モダニズム」、マルクス主義、国家主義の各立場から、戦後は「思想の科学研究所」、社会心理学、マス・コミュニケーション論、大衆社会論などの立場から様々に論じられながら、一定程度の多義的な意味を含みつつ、歴史的な文脈の中で意味を変容させていった。本研究はその過程を明らかにしたものである。その成果は、図書②で発表している。

第3に、東日本大震災における福島第一原子力発電所の事故以後の市民運動の興隆と「市民」による映画上映の関係性について考

察した成果がある。ここでは、「市民」概念の歴史的変容やこの概念をめぐる意味付けの軌轍を辿りつつ、現在の「市民」概念が自己決定性にもとづいた開放的な側面がある一方で、排他的・閉鎖的な意味合いをもたせて使用される場合があるという矛盾を内包したものであることを明らかにした。また、これに関連させる形で、「市民」による自主上映がソーシャル・メディア、ミニコミ、DVD、書籍など他のさまざまなメディアをも連関させながら、親密性と公共性が複雑に組み合わせられたコミュニティのネットワークを構築しつつある状況を示した。この成果は、雑誌論文①、学会発表③～⑧、図書⑤で発表している。また関連した研究を学会発表①でも発表している。

加えて、観客や受容に関する全般的な研究成果は、雑誌論文②や図書④にも生かされている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 藤木秀朗 「市民」と映画のネットワーク——3.11後の原発をめぐる社会運動の中で『JunCture 超域的日本文化研究』05号、2014年3月、114～129頁 (査読無し)
- ② Hideaki Fujiki. “Implicating Readers: Tezuka’s Early *Seinen* Manga.” *Mechademia* Vol. 8 (2013): 195-212. (査読有り)

[学会発表] (計8件)

- ① Hideaki Fujiki. “(De-)Problematizing Life: Documentary on the Post-3.11 Nuclear Catastrophe.” International Symposium: “Cinema and Post-Disaster Public Space.” 招待講演、オタゴ大学 (ニュージーランド) 2015年3月13日
- ② Hideaki Fujiki. “A History of Film Stardom in Modern Japan.” Invited lecture. Studying Group Meeting for the Summer School 2015 Meditated Worlds. 招待講演、東京大学、2014年2月20日
- ③ Hideaki Fujiki. “Citizen Activism and Cinema on Radiation.” 10th Crossroads in Cultural Studies Conference, Association for Cultural Studies. タンペレ・ホール (フィンランド)、2014年7月2日
- ④ Hideaki Fujiki. “Cinema for ‘Citizens’: Audiences and Activism in Contemporary Japan.” 招待講演、ウォリック大学 (イギリス)、2014年5月7日
- ⑤ Hideaki Fujiki. “Audience and Action: Recent Citizen Activism and Cinema.” 招待講演、プリン・マー大学 (アメリカ)、2014年4月1日
- ⑥ Hideaki Fujiki. “Using Cinema, Energizing Citizens: Activism and Media in Contemporary Japan.” 7th Asian Political and International Studies Association. 中東工科大学 (トルコ)、2013年10

月 26 日

⑦ Hideaki Fujiki. “Making Citizenship in Japan and Beyond: Post-3/11 Documentary Film and Audiences.” Society for Cinema and Media Studies Annual Conference. シカゴ・ドレイク・ホテル (アメリカ) 2013 年 3 月 7 日

⑧ Hideaki Fujiki. “Cinema and Citizenship in the Age of Globalization.” International Conference of Intercultural Communication.” 上海大学 (中国) 2012 年 12 月 16 日

〔図書〕 (計 4 件)

① Hideaki Fujiki. “Creating the Audience: Cinema as Popular Recreation and Social Education in Modern Japan.” In Daisuke Miyao ed. *Oxford Handbook of Japanese Cinema* (Oxford University Press, 2014), pp. 77-99.

② Hideaki Fujiki. *Making Personas: Transnational Film Stardom in Modern Japan*. (Harvard University Asia Center, 2013), pp. 1-408.

③ 藤木秀朗「大衆」としての映画観客」、ミツヨ・ワダ・マルシアーノ編『戦後』日本映画論——1950年代を読む』青弓社、2012年、121～142頁

④ Hideaki Fujiki and Alastair Phillips, eds. *The Japanese Cinema Book*. London: British Film Institute (2016 年刊行予定)

⑤ Hideaki Fujiki. “Networking Citizens through Film Screenings: Cinema and Media in the Post-3.11 Social Movement.” Jason G. Karlin and Patrick Galbraith eds. *Media Convergence in Modern Japan*. Kinema Club. (2015 年刊行予定)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

○取得状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

取得年月日 :

国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤木秀朗 (FUJIKI HIDEAKI)

名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号 : 90311711

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :